

能書が經典を書写するとき (要旨)

橋本貴朗*

本発表は能書、就中、貴族の能書が仏教經典を書写するとき、そのときに、『法華經』をはじめとするそれら經典の日本化の様相の一斑を窺おうとするものである。

まず、能書とは単に書に優れ文字を巧みに書けるということではなく、和歌・管絃あるいは武士などと同じく芸能、すなわち専門的な技能を有するものであることを、『新猿楽記』、『古今著聞集』、『普通唱導集』等の文献資料により、具体的に確認した。

次に、藤原行成を祖とする世尊寺家に着目して、同家六代・伊行の書論『夜鶴庭訓抄』により、貴族の能書の職能の一つに写經のあることを認めた。あわせて古来、写經の担い手であった經師と比較検討しながら、写經が貴族の能書の職能となった時期についても考察を加えた。行成がその画期かと推察される。

以上を踏まえ、貴族の能書による經典書写の実例として、行成とその玄孫、世尊寺家五代・定信を取り上げた。行成については、その日記『権記』を中心に古記録から事績を辿った。定信については、「般若理趣經」(春敬記念書道文庫蔵)他の遺品も交えて、後世「定信ノ様」(尊円親王『入木口伝抄』)と称される、その特徴的な書風を確認した。一字宝塔法華經「戸隠切」はまさに、そうした定信の書風が様式化された遺例といえよう。なお、この二人の写經は、近年紹介された後白河院当時の「蓮華王院宝蔵目録」(近世前期写、東

山御文庫蔵)に多数見えている点も興味深い。

造形性の重視という点では、上掲『入木口伝抄』の記述の通りに、楷書から行草書へと途中で書体を替える「仏説阿弥陀經」(佐野美術館蔵)も注目される。これらの写經は能書の専門的な技能が発揮されたものであろう。このような書写の有り様は、經典の本来の性格が変容し、日本の典籍となったことで可能になったものと解される。

翻って、貴族の能書がその腕を振るって經典を書写すること自体、中国には見られない日本独自の現象ではなかろうか。中国では、書は伝統的に君子の技芸であり、専門性は軽視される傾向にある(総合的であることが望まれる)。額字の揮毫をめぐる、日本と中国における評価の相違が想起されよう。

* 國學院大學准教授